東日本大震災津波被災集落の
復興まちづくりの事例紹介

2024/4/21

東京都立大学 都市環境学部 都市政策科学科

助教　益邑 明伸

①

②

③

被災前の赤浜のごく日常の風景
"岩手50"
て96-36
赤浜公民館提供

④

被災前の赤浜のごく日常の風景
赤浜公民館提供

⑤

避難道路
小学校へ
赤浜公民館提供

⑥

赤浜小学校
津波避難所
赤浜小学校
50m
赤浜公民館提供

⑦

被災前人口　371世帯　938人
津波・火災により 死者・行方不明者　93名
住宅被害全壊230戸/半壊7戸/一部損壊9戸
画像引用：大槌町震災アーカイブ https://archive.town.otsuchi.iwate.jp/search/archive/zxx020642.html

⑧

赤浜公民館提供

⑨

2014年

⑩

避難道路
小学校へ
赤浜公民館提供

⑪

⑫

⑬

⑭

住民による復興計画案づくり

⑮

⑯

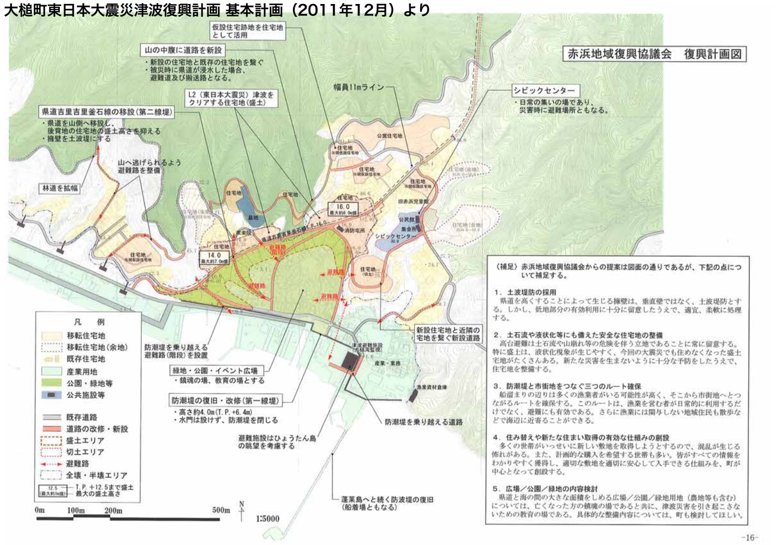
⑰

⑱

			2011年10月～11月	2011年12月
住民の動き	2011年7月ごろ～ **避難所での復興計画案作成** 住民有志 検討サポート： 東京大学都市デザイン研究室	2011年10月26日 **町長に復興計画案提出**	**地域復興協議会** （計4回） 町は事務局に徹し、 運営は住民に委任 **住民** **コーディネーター** 住民意見と検討チームの 橋渡しする中立的な役割 **検討チーム**	**大槌町東日本大震災津波復興計画　議決**
行政側の動き	2011年6月～ **国から委託を受けた設計チームが** **市街地復興の方針を3パターン検討** 3つの整備パターンの検討			

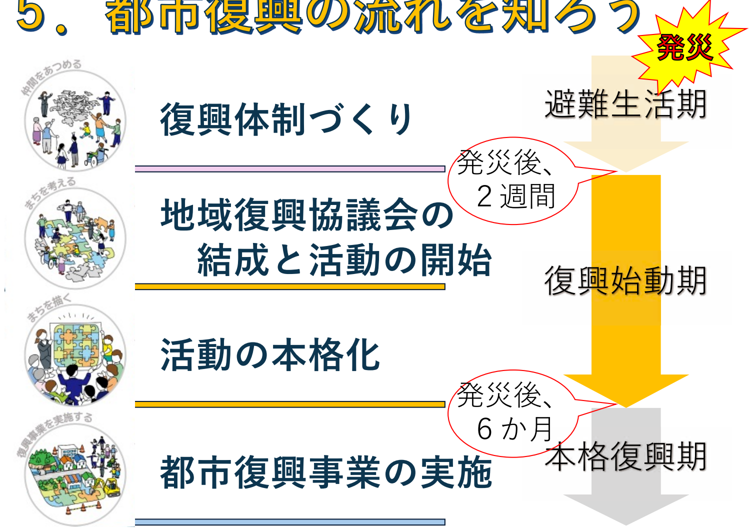
⑲

大槌町東日本大震災津波復興計画 基本計画（2011年12月）より



⑳

5．都市復興の流れを知ろう



㉑

なぜ赤浜では
被災後に「地域の復興組織」が
立ち上がったのか？

㉒

なぜ
「被災前の赤浜のごく日常の風景」
の
写真があるのか？

㉓

事前に「被災後の地域のことを考える」意義とは？

事前に「被災後の地域のことを考える」意義

- **いざ災害が起きてしまうと、**
  それぞれ各世帯の生活のことで精一杯
  - しかし被害が大きいほど、各世帯だけでは解決できない問題が生じる
  - 地域住民のまとまりとしての意見が必要になるときがある

事前に「被災後の地域のことを考える」意義

- **組織づくり、体制づくり、話し合いの場づくりに時間がかかる**
  - その時間は短くして、話し合いに時間を使いたい
  - 平時の体制を基に、非常時の取組ができる
  - 協働や共助が成立するためには、平時の取組が欠かせない

画像引用：大槌町震災アーカイブ

事前に「被災後の地域のことを考える」ことの もう１つの意義とは？

「発災後はお金と時間の
せめぎあいだった。
事前復興で、
地域にとってなにが大事で残すべきか、
考えてほしい。」

（宮城県のあるまちで住民の話し合いの場の進行役をした住民の方の言葉）

「地域らしさ」

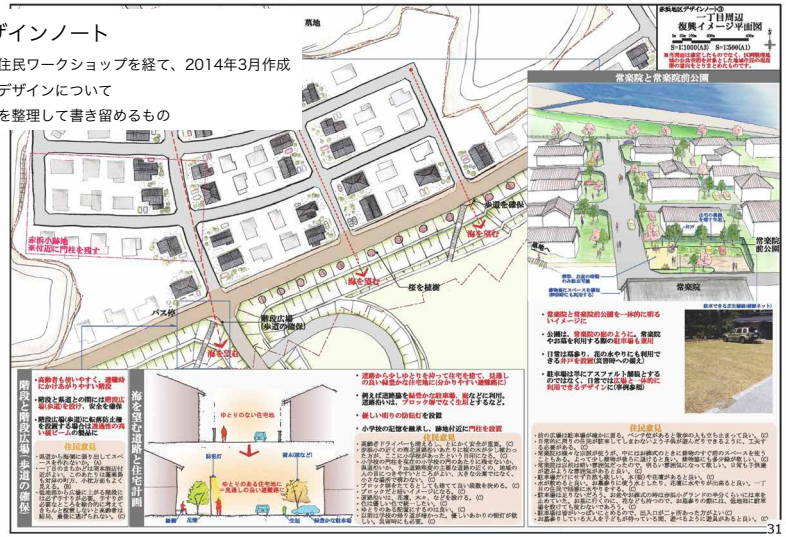
- 復興の方針は、
  都市の平時からの物理的・空間的な課題や被害程度を反映する必要がある
  だけでなく、住民の活動状況や住まい方などの地域特性に即すべきもの
- 復興事業完了後に、
  どこも同じような画一的な風景になってしまうのは残念な復興
- 事前に方針を考えることで、地域らしさを残した計画を目指せる

大槌デザインノート

地区ごとの住民ワークショップを経て、2014年3月作成

公共空間のデザインについて

住民の意見を整理して書き留めるもの



31

32

「地域らしさ」

地形や思い入れのある樹木などの空間的な特徴や、

住民の属性の傾向や住民活動の状況など暮らしの特徴によって、

復興方針や話し合いの進め方を変えていく必要がある

33

最後に

- **平時の取り組みをもとに、非常時の取組ができる**
- **「事前復興」＝「被災後の地域のことを考える」ことは、**
  地域の課題だけでなく、地域の資源・魅力について、
  地域で共有できるきっかけになりうる
  - 「前よりにぎやかになること」
    「防災性が高くなること」だけを目指すわけではない。
- **地域の将来像を考えることは、ふだんのまちづくりにつながる**

34